
普通になりたかった人間

超常毎日

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

普通になりたかった人間

【Nコード】

N8715W

【作者名】

超常毎日

【あらすじ】

お祖父ちゃんが亡くなってから早半年。その頃から古野雅は不良をやめた。最近はお祖母ちゃんの体調が優れない。だが、両親は仕事で忙しい。

なので、雅がお祖母ちゃんの世話をすることになった。

お祖母ちゃんが住んでいるこの地域は治安がいい。なので、不良だったことを悟られずにでも、喧嘩が巻き起こる事件に巻き込まれてしまう。

雅ははたして普通になることができるのだろうか。

ぜひ白く目にするので（ぜひ）温かい目（で）見て下さい。

新学期

お祖父ちゃんが亡くなってから早半年。僕は、その時から不良をやめた。色々と根本的に変えるのは難しかったけど最近はずうまいっっている気がする。だが、

「ただし雅、水持ってきて」

「ちよつと待ってて、お祖母ちゃん」

今はお祖母ちゃんの体調が優れないようだ。うまくいっている気がしていたけど、やはり、病気にはどうすることもできない。そう思いながら、キッチンから水を取る。

「はい。水だよ」

「ありがとう。雅。ゴホッ」

「無理したらダメだよ。お祖母ちゃん」

「本当にありがとうね」

「これぐらいいいよ。あと、お粥かゆ作っておいたから。冷めないうちに食べてね。じゃあ、学校に行ってくる」

「いつてらっしゃい」

「うん」

そう言いながら玄関のドアを閉じる。

僕は今日から新しい学校に行く。前の家から僕だけお祖母ちゃん家に行くこととなったから転校したのだ。

理由はお祖母ちゃんの体調は最近優れない。だから、世話をする人が僕の親は仕事で朝から晩までいないので僕がお祖母ちゃん家に泊まって世話をすることになった。

こっちにきてから1週間もたたないけど雰囲気にはだんだん慣れてきた。ここの人たちは良い人ばかりだ。時々、正月の時に来ているけど用事が終わったらすぐに帰っていたからなあ……………

この秋から新しい中学校、花田中学校に入る。夏休み前に転入するつもりだったけど、どうせなら2学期からのほうがいいと思い夏休み明けの今日、9月1日に入ることにした。

「結構緊張するなあ」

僕は今転入にはお決まりの廊下でドキドキしている。こんなのアニメぐらいしかないと考えていたけど意外と緊張するもんなんだなあ。

「では、入ってください」

先生に声を掛けられて腹を括る。ここは、普通にしていよう。よしっ。

普通にドアを開けて、普通に真ん中にある教卓まで歩く。いいぞ。その調子だ。

「新しく今日から転入してきた、古野雅君だ。みんな、仲良くしてやってくれ。古野、自己紹介」

「はい」

ここで失敗したら中学生生活終わりになってしまう。この自己紹介は成功させたい。だが、地味キャラと思われるのも嫌だからなあ。でも、ここは失敗しないことが最優先だ。

「先ほど先生から紹介してもらった古野雅です。身長は、170cmです。」

ここら辺に来るのは初めてじゃないんですが、この学校に来たのは今日が初めてです。ですから、分からないことが多いと思うので色々教えてください」

よしっ。普通だ。でも、普通すぎて何も良いところがないなあ。

ここは少し攻めて……。

「先生。時間くれませんか？」

「いいが、なんでだ？」

「ちよっと、得意芸を」

「まあ、やってみろ」

「ありがとうございます」

ここで、得意芸をする時間を貰った。

「では、やります」

「……………」

「この腕の取れた人形を……ほら、裁縫で簡単につけることができました」

確かに、腕の取れた人形はあった。確かに、裁縫で10秒もかからずに腕をつけた。なのに……………何この空気？絶対に僕がやってしまった感じだよなこれ。うわー、やめとけばよかった。なんか無駄な期待させておいてこれかよつ。みたいな雰囲気が出まくってるし。

「ま、どんまい」

先生に、そう言われ事実上学校生活が終わりを告げた。と、思っていたら

「凄い。凄い。立派。でも、予想とは大きく外れたけどね」と、いいながら立つ女の子。

「こら、海田。座れ。あと、古野。お前は海田の隣だ」

「宜しくね。古野君」

「だから、海田。立つなって」

クラスから笑いが起こる。ああ、笑いを取る。ってそういうことなのか。と改めて思いながら海田さんの隣に向かう。

「こちらこそ宜しく。海田さん。それと、さっき予想していたことって？」

「ああ、あれはねえ……」

考えるしぐさを少しばかりする。わざとかなあ。

「まさか、今考えてる？」

「！い、いや。私忘れっぽいからなあ。あははは」

そうなのか。忘れっぽいか……。ていうか、忘れっぽいって物の10秒前じゃね？まあ、いいか。

「で、予想って？」

「古野君が、魔術を使って学校つぶすとか」

「僕にそんな力ないし……。」

「未確認飛行物体を見つけることができるとか」

「そんな得意芸いらないし……。」

「実は、銀行強盗とか」

「もう、得意とかのレベルではないよね……」

よし。自己紹介が失敗してしまったので、授業で取り戻そう。でも、何を？

花田中学校に限らず、ここら辺は何度も言っているけど治安が良すぎる。絶対に、不良時代の僕がここにいたら迷惑的な存在になるだろう。だから、ここで普通の人間に戻ろう。

「であるからして」

花田中学校は9月1日から授業がある。僕はここで、普通の人間に戻るんだ。

手助け

入学してから、1日がたった。

この学校はほかの学校よりも学力が高く、建てられて50年というのになかなか綺麗なものだ。そして、生徒同士の仲が割とい方でイジメとは無縁である。なので、俺が不良ということがばれたらこの学校から邪魔もの扱いになるのだろうか。

2学期からこの花田学校、3・4に入った僕は、周りより出来ていないところが多すぎた。なので、目標を一つ一つクリアしていこう。

「古野君、手が止まってますよ」

その為にはまず、苦手な美術を終わらさないといけないようだった。

美術室から教室に帰ると昼食だった。

花田中学校は、弁当を持ってきて自分の席で食べる制度になっている。

「いただきます」

僕は弁当の蓋を開けて食べようとした。だが、

「あ、箸忘れた」

弁当に箸を入れるのを忘れたのだ。職員室に行ったら割り箸ぐらい貰れるだろうが、入学して2日の人間が忘れ物となると、教師の評価は下がるだろう。さて、どうしよう……

「古野君、どうして食べないの？」

海田さんが学校で売っている弁当を手を持ち、僕に話しかけてくる。

「箸忘れちゃって食べることができないんだ……」

「あ、それなら……はいこれ」

といって海田さんが渡してきたものは割り箸だった。

「でも、それだと海田さんが食べること出来ないんじゃないの？」

「私の今日のお昼ごはんはサンドイッチだからいいよ」

「じゃあ、割り箸ありがとう」

「いいよ、別に」

海田さんは優しいなあ。

「ええ？そのお弁当、自分で作ったの？」

「うん。まあ、家庭科は得意な方だから」

家にお祖母ちゃんしかいないということを伏せて話す。

「凄いね。今度私の分も作ってきてよ」

「まあ、いいけど」

「やったあ。ありがとう」

「じゃあ、明日でいいよね？」

「いつでも」

海田さんは元気な人だなあ。

ただいまの時刻、6時。僕は学校から最寄りのスーパーで今日の晩御飯の材料を買いに来ていた。

「今日はハンバーグでいいかな？」

などと呑気に考えていた僕だったが、

「ちよつと、やめてよ」

「いいじゃんかよ」

なんだか喧嘩でもしているようだった。僕は公共の施設で喧嘩は良くないですよ。喧嘩するなら喫煙室でもやってください。と注意しようと思い、様子を見ると、なんと

「あれっ？海田さん。こんなところで何しているの？」

僕が見たのは、クラスメイトで隣の席の海田さんと、見知らぬ高1ぐらいの男の人だった。

「こ、古野君？どうしてここに？」

海田さんは度肝を抜いていた。顔は真っ青になり僕に見つかったことがまずいような感じで。

「いや、今日の晩御飯を買いに。で、そちらの方は？」

「え？この人？」

焦る海田さんに、これ以上は聞いてはいけないと思い帰ろうとした時、

「恋人だよ」

と、男の人がそう言った。ああ、恋人だったんだ。……………

…は？高１ぐらいの男の人と海田さんが付き合っているの？

「何言っているのよ。古野君、誤解だからね」

ああ、誤解だったのか。じゃあ、その男の人は？

「じゃあ、そちらは？」

「え？ええと」

「

「あ、お兄さん？」

「そう。お兄ちゃん。私たちも買い物しに来たんだよ」

「へへえ。そうなんだ」

「じゃあ、私たちはこっちだから。また明日学校で」

「うん。学校で」

僕の買いたいハンバーグの材料は海田さんが行ったほうだけど、行くのをやめた。

「おや、今日はオムライスかい？」

「うん」

僕は結局、ハンバーグをやめてオムライスにした。

「いただきます」

「雅、ありがとうね」

「だから、いって」

最近はお祖母ちゃんの体調が良くなってきた。僕としては嬉しいな。

「雅、明日はお祖母ちゃんがお弁当作ろうか？」

「そういえば、海田さんにお弁当渡す約束してたっけな。」

「いいよ。別に。明日は」

「そう……」

「でも、また今度作ってね。お祖母ちゃんの料理は美味しいから」

さて、花田学校はこれで3日目だ。授業の用意はいつもと同じなのに、なぜか重たい。きつと、海田さんに会うのが辛いのだろう。教室に着くと、遅刻ギリギリで普通を目指す俺にとって遅刻なんて問題外だ。

自分の席に着き、海田さんに話しかけようとする……

「あれ？今日は休みなのか」

海田さんがいなかった。あの人に限って遅刻はないだろう。昨日はあんなに元気だったのに……。

海田さんはその日だけ休んだわけではなく、もう3日休んでいることになる。流石にクラスメイトも心配になってきている。

「ちよつと、古野」

と、僕が呼ばれたのは野球部のキャプテンだった飛驒洸君^{ひだつよし}だった。

「どうしたの？」

「これ、先生から」

と、渡されたのは海田さん宛の封筒だった。

「どうして僕が？」

「お前の家から海田の家がクラスの中で一番近いからな」

「へえ……。って、僕が行くの？」

「頼んだぞ」

「ちよつと待ってよ」

飛驒君に置いていかれ僕が海田さんの家までこの手紙を持っていかないといけなくなった。ご丁寧に地図まで付いている。しょうがないか。

「はい。海田ですけど。どちら様ですか？」

「あ、海田さん。久しぶり。古野ですよ」

「なんで古野君がここにいるの？」

「先生が海田さんに渡すものがあるって。じゃあ、ポストに入れとくから。お大事にね」

「待って」

「何？」

「お茶でも飲まない？」

「いいよ。そんなの」

「いいから」

海田さんの気力におされてしょうがなく入った。

「おじゃましてーす」

「いらつしやい」

玄関は驚くほど広かった。周りから見ても大きいほうの家なのに、中がこんなに広いとは……。

「海田さんの家って広いんだね」

「え？普通じゃないの」

いや、普通ではありません。

「古野君、ごめんなさい」

この言葉を言われるのに5分間沈黙だった。

「え？僕海田さんに謝まってもらうようなことしてないよ」

「この間のスーパー」

あ、あの時のことか。

「でも、別に何も変じゃ無かったよね」

「実は、あの人お兄ちゃんでもなんでも無いの……」

「ええ？」

「本当は、私が中2の時あの人に告白されて断ったのにもかかわらず毎日しつこくついて来たから私は言ったの『どうしたら、諦めて

くれる?』と。すると、『1日だけ付き合つて』と言われたからそれならと了解したけど、その日私は眠らされてあの人に私の写真を撮られてしまったの。

それ以来ずっと『付き合わないならこの写真をばら撒くぞ』って言われて嫌だつたところ、スーパーで古野君と出会つたの。それで変なこと言つたら写真ばら撒かれるだろうし仕方なく嘘をついてしまったの。ごめんなさい」

嘘をつかれたことはあの男のせいであり、海田さんのせいではない。僕は2つ海田さんにしつもんしなければならなくなった。

「あの男の居場所つて知ってる?」

「たしか、この前のスーパーの近くによくいるっていうのは聞いたことはあるけど。どうして?」

「後で、まとめて答えるから。海田さんはあの男のことはどうとも思っていないんだよね?」

「うん」

「分かつた。答えは今日の夜中に出すよ。それと、おじやましました」

不良をやめたから、極力喧嘩はしない。話し合いで決着をつけるんだ。それを、後押ししたのはやはり、彼女の涙なのだろうか。

「先輩。こんばんわ」

海田さんが行っていた場所にいつはいた。

「ああ、君はあの時の。どうしたの?」

「あの、海田さんの写真とやらを返してほしいんですけど」

「それは、無理だね」

「なんでですか?」

「あんな可愛い子を手中に納めるにはこの写真が必要なんだよ」

「確かに海田さんは可愛いけど、そのやり方は本当の納め方ではないと思いますけど」

「文句言つな。俺だって苦労したんだ」

「で、先輩はその写真返してくれるんですか？」

「だから、返さねえっていつているだろうがぁ」

と言いながら殴りかかってくる。が、不良時代の時に比べたらこれぐらいの攻撃しよばいけど、俺は喧嘩せずに戦うことを決めたから避けることしかない。

しばらく避けていると、男は電池切れになったらしく息が荒い。

「さあ、先輩返してくれます？」

「しつこいなあ。返さねえよ」

お前もしつけーよ。と、思っていたが男は懷からスタンガンを出す。これは、反則じゃね？

「死ねえええ」

そう叫びながらやってくるが、流石にスタンガンは危ない。避けながら裏拳でスタンガンだけ遠くに飛ばす。

「……………」

あ、やりすぎた。つい、不良時代の癖が。

「あの、ごめんなさい。これ……」

と、言いながら写真を渡してくる。

「あ、僕もやりすぎました」

一応謝りながら写真をうけとる。

「あと、生意気いってすいませんでした。何でもしますから許してください」

ちよつと、やりすぎたなあ。でも、

「じゃあ、今のことすべて忘れて海田さんには付きまとわないと約束します？」

「勿論」

「はい、海田ですけど」

「あ、僕だよ海田さん。入らせてもらっていいかな？」

「いいよ」

ガチャリ。とドアが開く。

さて、と話を切り出す。

「一応、プライバシーとして写真は見ていないけど取り戻してきたよ」

「本当？」

「はい。これ」

といいながら裏向きで渡すと、

「……………」

時が止まるとはこのことだろう。

海田さんはライターで写真を燃やす。そして、

「古野クーン。本当に見てないわよね？」

ライターでカチカチやりながら言われても……

「はい。本当です」

「なら、よろしい」

本当は少し見えた。その写真は

海田さんの可愛い寝顔の写真だった。

手助け（後書き）

すいません。今改造中なんで、究極の選択を読んだ人はすいませんが暫く待っていてください。

究極の選択

普通の人間とは？

この解は人によるだろう。

僕にしてみれば、身長・体重・見た目・成績などが、平均というところと捉えている。だから、まずは、不良時代で遅れた学力を平均まで上げよう。

「古野。この問題やってみろ」

入学してから1週間ちよつと。この学校にも馴染めてきたと思っただけど、ええ？ここら辺分らないところだし……。どうしよう。わからなそうにしている僕を見たのか、海田さんが答えを教えてください。

「x=12です」

「よくできた。その調子だ。お前らも今年受験なんだからいい加減勉強しろよ」

そつだ、僕は今中学3年生の秋なんだ。高校受験が控えているからさらにがんばらなくっちゃ。それと、

「海田さん、さっきありがとうね」

「いいよ。これぐらい」

この前のことがあってから海田さんは学校に来ている。やはり、写真は深刻な悩みだったのだろう。

それと今日知ったのだが、海田さんは学年1位を争うぐらい頭が良かった。僕とは大違いだ。

「古野君、今日暇？」

「別に何も無いけどどうかしたの？」

「放課後一緒に勉強しない？」

これは、学力を伸ばすのに良いチャンスだった。

「うん。勿論」

だって学年1位に勉強を教えてもらえることなんてめったにないしね。それに、海田さんは結構美人だから、2人きりっていうこと

は……まさか？

「あと、何人が呼ぶけどべつにいい？」

まあ、僕如きで1位が付くわけないよね……。

「いいよ。別に」

「そう。じゃあ……七美と、飛驒君。ちよつとこつちにきて」

海田さんが呼んだのは、田井七美たいなみと飛驒洸ひだつよしの2人だった。

「どうしたの？ 玲奈れな」

玲奈とは海田さんの下の名前だ。

「今日、この4人で勉強しようと思って」

「いいよ。別に」

田井さんは良いようだが、飛驒君はどうなんだろう。

「今日は途中で抜けるかもしれないけど」

「良いよ。途中でも」

「じゃあ、俺も行くわ」

どうやら行くようだ。飛驒君は野球部のキャプテンって言うってたけど何か関係するのかな……

「じゃあ、放課後に」

6限目が終わり、放課後になった。4人とも教室の一角に集まり机をくつつける。この時間を有効に使って学力を普通まで上げよう。
「さて、始めましょうか」

「そうだね」

「そうね」

「そうだな」

4時現在、勉強会の始まりだ。

「古野君は左、私は正面、七美は右、飛驒君は後ろで」

5時現在、なぜかゲーム会に代わっていた。一応ゲームは持ってきていい制度にはなっているけど僕は勉強しに来たのに……何これ

？4人で1体の獣を狩るゲームだけど何にも勉強にならないし……。
「おっと、もうこんな時間か。俺は帰るわ。楽しかったぜ。古野、
また対戦しような」

「あ、ああ」

「じゃあ、みんなこれで」

「……ばいばい」

飛騨君はなかなか良いやつだった。勉強はしなかったけど……

「さて、そろそろ勉強始めようか」

と、言いだす僕。せっかくなんだし勉強したい。

「でも、まだこいつ倒してないし」

「また、今度でいいじゃん。こんどもやってあげるから」

「じゃあ、勉強しようか」

6時現在、勉強会は終わりを迎えていた。

「さて、外も暗くなってきたし帰るか」

「そうだね」

「そうしよう」

2人が教室から出ていく。あ、まだ机元通りにしていないのに。

……しょうがない。1人でやるか。

机を元道りにすると、何か紙が落ちる。なんだろう？

「なになに」○○公園で会おう。今日こそ決着だ』だって」

……果たし状？これは助けないと。

「どいてどいて」

「あれ？古野君。どうしたの？」

「それが、飛騨君がはた

して。また明日」

「う、うん。ばいばい」

廊下を歩いていった海田さんと田井さんを走ってぬかす。

間に合わないかもしれない。でも、行こう。

いつて何

するんだ？僕は普通を目指しているんろ？なのに、喧嘩だなんて普通のやることじゃない。それに、不良云々はやめるとお祖父ちゃんの死で誓ったはずだ。でも、困っている友達がいる。

僕はこの後どうすればいいんだろう

苦痛の決断の先

迷った拳句やはり、僕には喧嘩を選ぶことは出来なかった。

その日の帰り道、夕焼けに照らされながら家に帰る。小学生が楽しそうに遊んでいる。ああ、僕もあの子たちみたいに楽しそうに遊べたらなあ。

家に着いても気分はまだ憂鬱のままだった。本当に飛驒君を助けて良かったのか。その言葉が頭の中をメリーゴーランドのように回る。

「はあ。ただいま」

「おや、どうしたのかい雅？」

お祖母ちゃんが僕の様子を疑う。

「いや、ね。本当にこの決断でよかったのかなあ。って思っていて、悩みの少しを打ち明ける。」

「うん。雅がそれでいいと思ったらいいけど、どうやら後悔している感じがでているからねえ」

お祖母ちゃんにはバレバレのようだった。

「分かった。全部言うよ」

「友達を裏切ることが、不良をやめると誓ったこと、どちらを選ぶかっていう話だね」

「うん」

全部包み隠さず言ってみた。お祖母ちゃんは直に受け止めてくれた。

「さっきもいったけど、雅がそれでいいと思うなら良いと思うけど、後悔しているんだろ？それって心のどこかでやっぱり友達を助けたって気持ちがあったんじゃないのかい」

「でも、僕とお祖父ちゃん決めて約束を簡単に破りたくないよ。お祖父ちゃんの死で決めたんだ。僕は不良をやめるって」

そのことを伝えるとお祖母ちゃんはびっくりしたような顔になり、「あの人なら、自分と友達を選ぶとしたらすぐに友達を選ぶでしょうね。だから、あの人との約束はもう破っているんだよ」

え？でも……

「お祖父ちゃんはかなりりの自己中って聞いたけど？」

「ああ、かなりの自己中の人だったけど友達のピンチにはどんな理由があっても駆けつけていたよ」

そうだったのか。僕は何という誤解を　。

「ということだから、晩御飯の買い物に行ってくるね」

「遅くならないようにね」

「うん。大丈夫」

後ろから、あなたに似た子がやりましたよ。というお祖母ちゃんの声が聞こえたけど、〇〇公園に急がないと。まだ夕方だから、間に合えばいいけど……。

逆光になっている夕日が迷っていたことをすっかり忘れさせてくれるようだった。

苦痛の決断の先（後書き）

とても短くてすいません。最近忙しくなつて更新は遅れるかもしれませんが、あなたが楽しめる内容を考えているのでしばらくお待ちください。

喧嘩・イジメそして仲直り？

「古野、昨日は助かった。本当にありがとう」

昨日の事件後の翌朝、学校の通学路で飛驒君にお礼を言われる。

「いいって。友達が困っていたら助けるのが当たり前だしね」

昨日の夕方、〇〇公園に行くと飛驒君と知らない人がやはり喧嘩していた。飛驒君一人に対し相手は5人だった。

飛驒君はへ口へ口でうまく立つことができていなかった。流石にこれはまずいと思い、とりあえず知らない人の一人に鳩尾みぞおちを入れると気を失ってしまった。まあ、割と治安いいところだから喧嘩慣れしていないのだろう。

僕が倒した人はリーダー的な人で残りの4人はビビって帰ってしまった。飛驒君も気を失い、住所を知らないので僕の家泊まらせることにした。

飛驒君が起きたのは今朝で勿論僕の家だ。そのまま朝ご飯を食べさせ、今に至る。しかし、一つ疑問が残る。

「どうして飛驒君は喧嘩なんかしていたの？」

「……」

「あ、ごめん。答えなくなったら答えなくていいけど」

「ああ、そういうことじゃないんだ。そのことを少し思い出して。お前には助けてもらったし言わないとな」

1度咳をして飛驒君は話し始める。

「俺が少し前まで野球部のキャプテンだったことは知ってるか？」

やはりそうか。

「うん。知ってるよ」

「そうか。ついこの前俺たち三年生は引退試合が行われた。相手は〇〇中学。この地域では珍しい荒れている中学だ。そこと試合をしたんだ」

確か昨日喧嘩した人は〇〇中学の制服をきていたような……………。

「そして試合は終盤。俺たちが先攻で、向こうが後攻。スコアは1-0のフルカウント。そして9回裏でツーアウト満塁。ここですべてが決まる。」

そして、うちのピッチャーがストライクコースのギリギリにストリートを決める。相手は見逃した。そして、審判がこう言った『ストライク。ゲームセット』と。普通審判に逆らうことはできない。しかし、〇〇中学は講義を始めた。『今は、ボールだろ』と。確かに厳しいところだったが、審判がストライクと言っている。

俺は、もう諦めるよ、と思い相手に向かって手を差し伸べたんだ。そしたら相手が、『お前が仕組んだんだろ』と俺に向かって言ってきた。そんなことはありません。と言ったらお前の面覚えたからな。って言われたんだ。握手せずに」

飛驒君の話をここまで聞く。

「でも、なんで昨日の喧嘩につながるの？あ、まさか」

「そう。俺たち野球部がその次の試合で負けてからずっと野球の試合が終わっていないという建前で俺に喧嘩を売っているんだ。本当は俺がああ試合を仕組んだと思って復讐しているんだ。まあ、治安が悪いしな。他の部員が傷つくより俺が傷ついた方がまだいいからな」

飛驒君の言うことは分かった。でも、

「でも、それって飛驒君に濡れ衣が着せられているだけじゃないか。そんなのおかしいじゃないか。飛驒君はそれで良かったの？」

「いや、だから部員が」

「飛驒君の気持ちを聞いてるんだよ」

ちよっとキレる。飛驒君の本音が聞きたかった。

「正直、嫌だった。なんで俺が俺だけがこんな目に合わなくちゃならないのか。本当にそう思っていた」

「うん。分かった。じゃあ、今日の放課後行くところあるからついてきて」

「？ なんかのことかわからないけど、分かった」

飛驒君の了承を得たことだし、準備しないと。

「飛驒君、本当のことをいって」

現在、放課後となり〇〇公園にいる。

「古野……これってありがた迷惑っていうんだぜ」

〇〇公園にいるのは、僕・飛驒君そして昨日の〇〇中学の野球部を呼んだ。

「お世辞はいいから早く。今日はスーパーでセールなんだから」

そして、飛驒君が〇〇中学の野球部の人に言う。

「俺はするはしていない。お前たちが負けた悔しさをもう俺にぶつけるな」

飛驒君がそういうと、〇〇中学の野球部のみんなは……………笑っている。

「何がおかしいんだ？」

思わず僕が尋ねる。すると、

「そんなの分かってるって。あのコースは素晴らしかったもんな。でもな、俺らは誰かをいじめるのが好きなんだよ」

「ちよつと待て」

「楽しいぜ。お前もやってみるか？」

「おい」

「お前は昨日戦ったけどなかなか強かったしな。」

「お前たちは、いじめられる奴のこと、飛驒君の気持ちを考えたことがあるのか？」

「はああ？んなもんあるわけないだろ」

その言葉を聞き、そいつに本気で鳩尾に拳をぶつける。

「ぐわあつ。イテーじゃなーか。な、何しやがる。グファ」

そいつの口から血が出る。

「本当に痛いってそういうことではない。この一発よりもイジメは痛い。いじめを受けるってこれより痛いんだよ」

そして、6・7人いた〇〇中学の野球部を全滅させる。

「それで分かったか？イジメを受ける人の気持ちはこの痛みより痛
いってことが」

「あ、ああ」

「なら、もう誰もイジメないな？ 勿論飛驒君も含めて」

「も、勿論だ。これより痛い気持ちは味わいたくない」

「どうやら理解したようだった。なら、今日の本題を済ませるか。

「分かったなら」

「

「ひ、飛驒。いままで悪かったな。こんなことさせていて」

「分かったならいいって。もうこれ以上こんなことつづけるなよ」

「なんと、僕が言おうとしていたことが言われてしまった。という
ことは、もうこれ以上飛驒君が悩むことないだろう。」

「お前たちも一応手当しておけよ。手加減しても急所なら痛いしな」

「まあ、怪我させるのは流石にな……。と思い手を抜いたけど、向
こうは「じゃあ、本気なら何が出るんだ？」との顔をしている。別
に本気出してもかめはめ波はでないって。」

「じゃあ、古野。帰ろうぜ」

「あ、うん。そうだね。あれ……？ 何か忘れてる気がするんだ
けど何だっけ？あ、セール」

「そういえばそんなこと言ってたな」

「ごめん飛驒君。一緒に帰れないや」

「思わず、今だけでいいから瞬間移動でスーパーまで行きたい。と
夕日に叫びたかった……。」

喧嘩・イジメそして仲直り？（後書き）

更新遅れてすいません。色々ありまして……。

今回は友情を深めました。ちよつと殴る系がありましたが、苦手な方は心臓に良くありませんので左上のを押しましょう。

そして、他作品を見れば分かりますが今作もほんの少しだけパクリを入れました。えーと、ドラゴンボールの孫悟空の技、かめはめ波と瞬間移動です。

分かりましたか？ 実は、セル編で孫悟空は瞬間移動を使っています。

これは、ドラゴンボールを知らなければ、は？となりますがね……。まあ、そんなこんなでスローペースで更新していきますが、どうぞ宜しくお願いします。

何も変わっていない

「五月蠅いで、うるさいっていうんだ」

今は12月10日。今日は、僕・海田さん・飛驒君・田井さんの4人でいつもの勉強会をしていて田井さんに漢字を教えてもらっている。

「う、うん」

しかし田井さんは戸惑っている。どうしてだろうか？

「田井さん、どうしたの？」

心配して僕が声をかける。すると、

「あの、お昼のことで……ありがとうございました」

そういえば田井さんは昼、弁当を忘れていてたまたま海田さんが弁当を持ってきたので（もう海田さんに弁当を渡すことが日課になっている）田井さんに弁当を渡したんだっけ。僕としてはあまらずに済んで助かったけど……。

「僕こそあまらずに済んでありがとう。残ったら困るし」

「で、でも……」

「お互い利害が一致してたんだしこの話はもうおしまい。今日は特に寒いね。雪も降ってるし」

「そうだね」

「古野君、もうすっかりクラスのみんなと馴染んだね。1学期間なのに」

海田さんにそう言われて初めてそう思った。普通に学園生活を送っているとかこんなに楽しい日々があったなんて。

「そうだね。結構普通に過ごしていてもみんなと仲良く過ごせるし」

「いや、俺に言わせると古野は普通じゃないと思うけど……」

そうだった。飛驒君は3カ月前に〇〇中学の人と喧嘩して本当の僕を知っているんだっけ。このことは飛驒君には内緒にしてもらっている。僕もあの事件を内緒にする代わりに。

あれ以来、僕はこの地域で喧嘩が強い平和主義者という噂が回っている。けど喧嘩はする気ないし、したくもない。実際にあれから喧嘩はしていない。

だから、飛騨君以外誰も僕が喧嘩しているところをみたことがないため噂はすぐになくなった。まあ、そのうわさのおかげで真偽を確かめるために僕と話すクラスメイトが増えたからすぐに馴染めたんだと思う。

ブルブル。

僕の携帯が鳴る。

「はい。古野です」

「君は……お孫さんですか？」

誰だろう。お孫というからにはお祖母ちゃんの知り合いかな？

「あ、はい。で、どちら様ですか？」

「そうか……雅君だね」

「あ、はい。で、どちら様ですか？」

「落ち着いて聞いてくれ」

「あ、はい。で、どちら様ですか？」

さつさと名前ぐらい言えよ……。

「君のお祖母ちゃんが亡くなった」

君のお祖母ちゃんが亡くなったさんか……。どこが苗字で、どこが名前だろう。

「えっと……苗字は何ですか？」

「俺の？田中だけだ」

どこにも田中なんてついてないだろ……。

「あの、名前のイタズラ電話とか初めて来ましたし今度からそういうこと控えてもらえますか？」

「分かった。で、病院の場所は」

「なぜ俺を病院に連れていく？痛い子だと思っただの？」

それはちよつと悲しい……。

「いや、君のお祖母ちゃんが亡くなったのになんでそんなに明るい

「なんだろうと思つて精神科の病院に連れて行こうかと」

「なんで、精神科なんだよ……。皮膚科で良かったからせめて精神科は言われなくなかった……。」

「つて、田中さん？今何て言つた？」

「精神科の」

「その前っ」

「聞き間違いであつてほしいワードがあつた。」

「ああ、君のお祖母ちゃんが亡くなつたんだよ。今日の4時前」

「……………」

「おーい？雅君？」

「う、うそだろ？あのお祖母ちゃんだぜ？今朝なんか余裕で歩いていたのに。」

「あの、田中さん。病院の場所を教えてください」

「まだ見ていない。きっと生きているはずだ。早く看病してやらな
いと。」

「病院は」

「

「今日は来ていただきありがとうございます。天国でお母さんも笑つていると思います。今日は本当にありがとうございます」

「12月13日。お祖母ちゃんのお葬式が行われた。お母さんが仕事を休みみんなの前でスピーチをする。周りを見ると泣いている人ばかりだ。僕は……泣いていない。どうやら悲しみより後悔のほう
が大きいらしい。」

「結局、普通に暮らしていても悲しむ人は出てくるじゃないか……」
「お祖父ちゃんのお葬式の時、涙があふれて止まらなかったけど、
今は一滴も涙が出ない。周りからは冷たい人間だと思われるかもしれない。僕だつて泣きたいんだ。でも、でも」

「雅はこれからどうするの？」

「半年ぶりにお母さんに会う。お父さんはもう帰つたようだ。」

「とりあえず今から転校は嫌だから」

ぶつきらばうにそういうと、

「我が儘言わないで。お母さんも忙しいんだから。でも、どうせ私たちの家にも1人なのは変わらないし……」

「じゃあ、転校は無しで」

無理やり話を進める。早く一人になりたい。考えたいことがたくさんあるし……。

「じゃあ、田中さんと暮らすなら許すわ」

あの人か……。でも、あの方は悪い人ではなさそうだし……。

「分かった。じゃあね」

これでやっと一人になれる。

「ここなら大丈夫かな……」

僕は近くの公園で考え事をする。

おじいちゃんが死んでから僕は普通を目指した。

あのときは不良でその時の自分を見つめなおすと他人を悲しませるだけだった。だから、人気者でも悪者でもない普通になりたかった。

でも、お祖母ちゃんの死から学んだ。何も変わっていない。不良から何も変化していないんだ。みんな悲しんでいる。それは僕が普通に接したからだ。僕がもっと積極的に看病したらお祖母ちゃんが死なず、だれも悲しまなかったんだ。

今から積極的な人間に戻るのには無理がある。もう精神的にキツイ。どうしたらいいんだ、僕は……。

悩んでいた僕の目の前に

年も明け、俺は新年初めての学校に行く。

「あ、飛驒君。あけましておめでとつ」

「ああ、海田か。おめでとう」

海田は一拍置き、

「今日は来てくれるかな？」

と、俺に問いかける。どうやら俺と同じことを考えていたようだった。

「分らないけど、今日来てなかったらこれから出会う希望は薄いだろうな……」

「そうだよね……」

俺たちは共通の悩みを抱えていた。

それは、古野がお祖母ちゃんのお葬式以来学校にも古野の家にもいないのことだった……。

長く冷たくそして緊張した通学路を終えクラスの扉を海田が開ける。すると……

「へえ？」

海田が思い切り驚いている。なんだ？なにがあつたんだ？

俺も恐る恐る教室を覗くと

普通になりたかった人間

悩んでいた僕の目の前に、かつての不良仲間がいた。

「古野さん。こんばわっす」

「なんでお前ここにいるんだ？」

僕に話しかけてきたこいつは仲居という。なぜか敬語を使う。まあ、昔はそこから鬼人とか言われていたし無理ないよな。

「そりゃ古野のお祖母さんには世話になったし」

こいつは高江という。高江は普通にタメ口だ。俺より1年下級生のはずなのに。まあ、僕を恐れないところはほめるべきところだろう。しかし、問題はそこではない。

「僕　ゴホンッ。俺は2人とも呼んでないぞ」

昔の言い方じゃないとなんだか恥ずかしい。実は、僕は自分のことを俺といっていた。

「え？呼ばれましたよ。古野さんのお母さんに」

お母さんか……。要らないところで気を使いやがって……。

「それに、突然いなくなるし俺たち困りましたよ」

勝手に困っていてそれを僕に言うか？

「まあ、仲居。今から古野を連れ返せばいいだろ？」

「お前、先輩にタメ口使うな。でも、高江の言うとおりです。また一緒に不良やりましょうよ」

仲居にここまで言われて思いつめる。

今の僕　いや、俺が何かをすると必ず悲しむ人が出てくる。ならだれもが近寄れなくなる存在になればいいんだ。その存在とは？
答えは不良だ。不良に戻ればいいんだ。

今思うと、この時は本当に精神的にヤバかったんだと思う。そうじゃないとこんな答えは出さないはずだった……。

驚いている海田を横目に恐る恐る教室を見ると

「は？」

古野がいた。しかし、いたのだが

「お前どうしたんだよ……」

最後に見た古野とは変わっていた。

金髪にしワックスをつけて髪をたてている。さらに、制服は着崩しピアスまでしている。それにタバコまで吸っている。俺を助けてくれた古野とは思えない。まるで鬼人のようだった。

一見そこら辺の不良だったが何か雰囲気違った。恐ろしい・破壊など普通の不良とは格が違う何かを持っていたが、本当にこれでいいのかという迷いの雰囲気も出ていた。

「おう。海田に飛騨じゃねーか。久しぶりだな」

古野に声をかけられる。

「は ああ、そうだな」

「う、うん」

一瞬古野から恐怖を感じた。俺は思わず敬語になりそうになったが、海田はがんばったようだ。

「はい」

古野は俺たちに手を出す。どういうことだ？

「くれよ。お年玉」

どうやらカツアゲらしい。古野の机を見ると1000円札がたくさんある。みんな古野のオーラに負けたんだな。

「悪いな。今日は金なくて」

俺がそついうと、

「は？じゃあ、銀行強盗でもしてこいよ」

ふざけている。本当にどうしたのだろう。

「それは立派な犯罪だ。そんなこと俺は出来ないしする気もない」

「なに正義ぶってんだよ。〇〇中学の奴らにぼこられていたくせに

よ」

あ。それはお互いの秘密なのに。

「おい。それは秘密って話だろ。なに破ってんだよ」

「じゃあ、契約書でもあんのか？」

ク……。今更古野が喧嘩強いといったところでこの格好を見れば一目瞭然。俺だけがダメージを負ったということか……。

「分かった。ほらよ。お年玉だ」

財布から1000円札を出す。

「あるんなら、さつさとだせよ」

そういいながら俺の手から1000円札を奪う。しかし、俺は1000円札を放さない。

「どうして、そんなにお前は変わってしまったんだ？」

そう聞くと、

「お前には関係ないっ」

俺は古野にもすごい力で1000円札を奪われる。ちょっとだけ、1000円札が破れる。

そして、俺の隣にいた海田にまで手を出す。海田はおとなしく渡した。それは絶望からなっているのだろう。目の焦点が合っていない。今にも倒れそう。俺も倒れたいよ。今すぐに。そして、目が覚めたら夢オチって設定がいいよ。そう思いながら自分の席に座る。

授業中、時々私は古野君の様子を見ていた。どうしてこんなことになったのだろう。そのヒントだけでも欲しくて見つけようとした。結果、表情だけならわかるけど気持ちまでは分からなかった。隣の席というアドバンテージを使ったのに。でも、なぜか雰囲気には迷いがあつたのは分かる。

私は古野君に助けられた。けど、私はその恩を返していない。だから、古野君が悩んでいる今助けてあげないと。それには、飛驒君

と七美の協力が必要になるかも。即急に作戦会議をしないと。

僕 いや、俺か。俺はどうもこの教室にいと僕っていうのが先に出てしまう。やれやれ。仲居達の前では全然違うのにな。ああ、勿論あいつらは帰らせた。さっさと孤独になりたかったからだ。今朝のカツアゲでクラスのほとんどが話しかけてこなくなった。こつやって脅していけばだれも俺には近寄ってこないはずだ。

放課後となり、誰かが話しかけてくる。

「古野君。今日はどうしてお弁当作ってくれなかったの？」

ああ、海田か。

「作って俺に何かメリットあるか？」

「ないけど……」

「用事終わったか？早く帰りたいんだけどなあ」

後半はキレ気味で言う。これでビビってもうかわってほしくない。もう離れてほしい。そう思っていたのに、海田はこんなことを言った。「今日、久しぶりの4人で勉強会しない」と。

だから、かわってほしくないんだって。

「無理。行ったら報酬で100万円でもくれるのか？」

止めをさす。中3で100万円持っている奴はいないだろ。さて、帰るか。

「分かった。100万円で来てくれるんだね？」

おいおい。冗談だって。マジになんなよ。

「冗談だって。お前がいくら言っても諦めないから嘘混ぜたんだよ。でも、行かないから」

「ダメ。今日だけで良いから来て」

チィ。思わず舌打ちをする。しつこい。

「じゃあ、今日行ったらもう一生付きまとわないか？」

「分かった」

「よし。タイムリミットは完全下校時刻の5時だ」

今は4時なので1時間程度だ。

「じゃあ、さっそくはいろっか」

「あ、ああ」

海田に引つ張られる。しょうがない。1時間の辛抱だ。

中に入ると飛驒と田井が待っていた。3つの机と1つの机が向かいにあり3つの机の内2つは先の二人が座っていた。海田は3つの机のほうに座るため、俺は必然的に1つの机のほうになる。

よっこらせ。そう言いながら座ると、3者が俺のほうを見ていた。何のホラー映画だよ。そう思っていると、海田が俺に向かって話し始める。

「本当は今日、勉強会じゃなくて私たちの話を聞いてほしいの」

なんとなくそんなところだと思っていた。

「分かった。だから、話を続ける」

きつくそういうと海田は、そうだよ。と子声でいい本題に入った。

「私は、まだ古野君にあの事のお礼できていないの。私は本当に悩んでいたから転校してきたばかりの古野君が助けてくれたのは本当にうれしかった。ありがとう。それで、お礼がしたいんだけど古野君は本当にそれでいいの？」

突然質問されて困る。

「何が？」

「だから、ピアスとかタバコとかやっていて」

要するに、不良やっていて俺は本当にこれでいいのかということか。

「そんなの俺の勝手だろ。お前に注意される理由はないと思うが」

「でも、古野君何か迷っている気がする」

迷っている？ 何にだ？

「俺は決心したんだ。もう誰にも迷惑かけない」と

「誰も迷惑なんてかかっているとは思っていないよ。少なくともこの学校の人たちはね」

そんなわけない。それに、俺の気持ちも知らずに。

「五月蠅いなあ」

思わず叫んでしまう。本当に思わずだった。この教室だったからなのか分らない。だが、ここでバトンタッチのようで海田から田井に会話の主導者が変わる。

「覚えていますか？ 私たちがここでやった漢字の勉強。確か初めての漢字は『五月蠅い』だったと思います」

そうだ。だから思わずだったのか。

「廊下で少し聞こえちゃいましたが、古野君のお弁当を作るメリツトはありますよ」

「な、なんだ」

このままだと今の俺に良くないことが起こりそうだ。

「私が喜びます」

「それだとただの自己満足じゃないか」

「一度だけお弁当を古野君から貰ったことがあります。そのお弁当は思わず顔が綻ぶほど美味しかったのを覚えています」

クソッ。何の説得だよ。俺はもう不良の道を歩むって決めたんだよ。

田井が話し終わると同時に飛驒が話し始める。

「濡れ衣から俺を救ってくれたのは古野だった。

あのときはホントにこんな転校生が俺を助けてくれるかなって半信半疑だった。

けど、イジメについてお前が教えてくれた。

俺の気持ちまで理解してくれた。

そして、お前が俺を助けてくれた。

なら、今度は俺がお前を救う番だ。悩み事があるならいつてくれよ」

キンコーンカーンコーン。完全下校の時間になる。俺は顔を伏せながら逃げるように教室を出て行った。顔を上げると涙が出そうだったから。

そして、家に着く。すると、

「あ、雅君。お帰り」

「ただいま。あの、田中さん。一生のお願いがあるんですけど聞いてくれますか？」

「ん？ まあいいけど」

「じゃあ」

5時になり、なぜか顔を伏せながら逃げるように帰って行った。どうしたのだろうか。

「さて、七美と飛驒君。帰ろう」

「はい」

「そうだな」

海田が吹っ切れたように言う。

「どうやら言いたいことは全部言ったようだな」

「飛驒君だって顔が笑っているよ」

反射的に顔に手を当てる。あ、本当だ。

「まあ、やることやったしな」

「それはそうだね」

「さて、外も寒くなってきたことだしさっさと帰ろうか」

今朝、天気予報で大雨マークだったのに外はまるで、俺たちの心のように晴れ晴れとしているようだった。

翌朝、学校に登校するとまたも事件発生。

「おい……古野……」

教室の一番前、つまり黒板の下と言つべき場所で古野が土下座をしていた。

髪は色がちゃんと戻っているしピアスもしていない。これならタバコもないだろう。だが、

「おい、古野。顔上げろって」

「この声は……飛驒君。本当にゴメン」

「だから何言つてんだよ。顔上げろって」

そう言いながらカバンを机の上に置くと封筒が置いてあった。なんだこれは？

中身を見ると……10000円と10000円があつた。この1000円ちよつと破れているな……まさか、昨日のカツアゲの詫びつてことか。

「おい、古野。俺たちはカツアゲの分だけで良いんだよ。お前からは10000円以上のものを貰っているんだからな」

「それは、30万円用意してくれませんか？」

「は？」

俺 いや、僕は田中さんに一生のお願いをしていた。

「クラスメイトにカツアゲしたのを謝りたくて。10倍で返さないとみんなにお詫びすらできないから」

そついうと、田中さんは

「分かった。用意してやる。でもな、そんなのに金なんか必要ないと思うぜ」

「でもっ」

「分かっている。お前にアドバイスしたただけだから」

「田中さん。本当にすいません。これから迷惑かけると思いますが宜しく願ひします。ところで、田中なんて言つんですか？」

「太郎」

「え？田中太郎ですか？」

「ああ」

（うわ。めっちゃ普通な名前じゃん）

「じゃあ、これからも宜しく願いします」

「こちらこそ」

翌朝、1番乗りで教室に行きみんなの机の上に11000円が入った封筒を置く。そして、教室の一番前で土下座をする。

それから5分後……

「おはよつす。うわつ。どうしたんだよ。古野。土下座なんかしてホント昨日は物騒だと思ったら今日は土下座って分かりやすいやら分かりにくいやら……」

クラスメイトの男子が1人入ってくる。

「これぐらいしないとお詫びにならないし……」

「いや、だからって土下座はあれじゃないのか……なんだこの封筒？ 11000円！ なんでこんなところに？ あ、お前か昨日のカツアゲのやつか。でもな、俺は金なんかじゃなくてお前の態度が元道りになったことが10000円以上の価値があるとおもっぜ。1日でこんな変わるなんて。だから、俺は昨日の10000円だけ貰って置いて10000円はいらないから」

「でもっ」

「いいんだって。っていうかちゃんと、借りた人に金返しておけよ」

そのあとクラスメイトは来たが、みんなさっきの男子生徒と同じことを言う。困ったなあ。すると、

「おい……古野……」

「この声は……飛驒君。本当にゴメン」
心の底から謝る。

飛驒君がカバンを机に音が聞こえる。そして、封筒を開ける音も。

「おい、古野。俺たちはカツアゲの分だけで良いんだよ。お前からは10000円以上のものを貰っているんだからな」

みんな……ゴメン。そしてありがとう。

そのあと、クラスメイト30人から10000円を返してもらった。

そして、昼休みに僕は海田さん・飛驒君・田井さんを放課後に勉強会をしようと誘った。

そして、放課後。昨日と同じく1対3の状況を作る。勿論僕が1のほうだ。

「本当は今日、勉強会じゃなくて僕の話聞いてほしい」
海田さんが「真似された」と嘆いている。

「クラスの皆にも迷惑かけたけど、君たちには本当に助けられた。ありがとう」

「いえいえ。こちらこそ」

と田井さん。

「これで解決だな」
と飛驒君。

「やっと恩返しができたわ」
と海田さん。

「これで、30万が返ってくる」

と、田中さん。

若干1名おかしいながらも、お祖父ちゃん・お祖母ちゃんの死、そして、この人たちと出会えたことを本当に感謝している。

普通。それになりたい人間は多々いるだろう。でも、本当は普通なんて言葉は存在しないと思う。個性・性格。これらは、誰もが持っている良いものであり、決して普通でもそれ以下でもない。

真ん中や平均などは第1段階としての狙うのは良いことだと思つても、そこを最終目標にするのは良くない。

なぜなら、そこで諦めたら普通よりも素晴らしいものを見ることが出来ないからだ。

普通になりたかった人間（後書き）

お疲れさまでした。長い文章ですいませんでした。これでこの作品は終わりですが、いかがでしたか。

普通……考えてみれば普通ってなんだろう。そう思ったのがきつかけでこの作品を書きました。

本当は3話ぐらいで終わらすつもりだったのですがちょっと書いてみようかなぐらいの勢いでやっていたらあつという間に7話。その結果としてここまで出来ました。

完結させるものとしてはほとんど初めてでこういう締めがいいかなり悩みました。

そして、普通。生きて行く上でこの単語は絶対に出てくるでしょう。その時にでも「普通になりたかった人間はちょっと駄作だったな」とでも思ってくれたら私としては嬉しいです。

では、最後に。この作品を最後まで見ていただき、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8715w/>

普通になりたかった人間

2011年10月10日03時10分発行